【論文】

『司祭』とそのオーディエンス

----映画テクストのエンコーディング/ディコーディング ----

佐々木 俊 彦

1. 序

1.1. 本論の目的

文化という広大な領域における重要な研究対象として、メディアの存在を指摘することができる。 メディアとは、言うまでもなく「コミュニケーションを可能にする媒体」あるいは「コミュニケー ションをなかだちする手段」であり、そこには「記号を乗せて伝達の役割を果たすすべてのもの」が 含まれる。伝統的なマス・コミュニケーションのメディアに限定しても、新聞、雑誌、書籍、ラジ オ、テレビ、映画などを数えることが可能である。1)

本稿では、これらのうちで特に映画を取り上げ、メディアのカルチュラル・スタディーズの立場から、映画作品というメディア・テクストをめぐるエンコーディングとディコーディング及びそのオーディエンスに焦点を当てて考察を試みる²⁾。

1.2. 論述の流れ

本論における論述の流れは、概略以下のとおりである。

最初に、ホールの論考を中心に、諸家の所説を参考にして、メディア・テクストのエンコーディングとディコーディングに関する理論を整理、検討する。その後で、当該コミュニケーション・モデルを映画メディアに適用するために、予備的考察を行なう。次に、具体的な映画メディア・テクストとして『司祭』を取り上げ、そのテクストとエンコーディングを分析、検討する。さらに、この検討結果と前述のモデルとを合体させ、社会的視点を盛り込んで、『司祭』のコミュニケーション・モデルについて考察する。その上で、本論では、インターネット上の映画データベース中にある一

¹⁾ 以上のメディアの定義と例示に当たっては、『記号学大事典』における「メディアの記号論」の項目(真鍋一史;406-08)の記述を参考にした。鉤括弧内の引用は、406ページからのものである。また、現在の記号論の成果と到達点に関して、同書を参照したところが多い。

²⁾ 本論文の執筆に際し、カルチュラル・スタディーズ全般について参考にしたのは、Bassnett xiii-xxvii, 3-80、花田・吉見・スパークス 341-502 及び Turner である。メディア・(カルチュラル・) スタディーズに関しては、Ang 35-52、藤田「カルチュラル・スタディ派におけるメディア論とネオ・マルクス主義的社会構成体論との関連性」、「『読み手』の発見」、Morley 1-41 及び吉見を参照した。特に、カルチュラル・スタディーズの方法によるテレビ研究と映画研究については、各々Fiske and Hartley と Freccero を参照した。また、テレビの番組・視聴者分析に関しては、伊藤・藤田も参考にした。

般のオーディエンスによる映画批評を、映画『司祭』というテクストについてのメタ・テクストとして、分析、検討の対象とする。まず、ディコーディングに関するホールの理論を応用、修正し、『司祭』テクストの読解についての新たな理論的枠組みとして、5種類の読解パターンを導出する。続いて、『司祭』テクストの実際の読解例を詳細にテクスト分析して、これらの読解パターンの有効性を吟味、検証に付す。さらに、オーディエンスによる『司祭』テクストの読解に焦点を当てながら、若干の発展的考察を行なう。最後に、本論全体の議論をまとめ、今後の諸課題を展望する。

なお、論文本体の後に、補遺 A 及び B を付す。

2. 方法論の検討

2.1. カルチュラル・スタディーズのマス・コミュニケーション理論 2.1.1. ホールのエンコーディング / ディコーディング・モデル 3

2.1.1.1. 諸契機の節合としてのコミュニケーション

ステュアート・ホール(Stuart Hall)は、その重要な論考「エンコーディング/ディコーディング」("Encoding/decoding")の中で、コミュニケーション過程を、生産・流通・分配/消費・再生産という相対的に自律した諸契機の節合を通して生産、維持される複合的構造として捉えている。この理論に従えば、放送機関は、技術的インフラストラクチャー・生産関係・知識の枠組みに依って、番組等のメディア・テクストを生産する。このテクスト生産の過程がエンコーディング(コード化、記号化)であり、生産されたテクストは第1の意味構造を成す。次の段階で、放送番組等は「有意味な」ディスコース(言説)として社会的に流通する。さらに次の局面では、特定の社会的・言説的位置を占め状況付けられた主体により、テクストの消費、すなわちディコーディング(脱コード化、記号解読)が行なわれる。この過程において、新たな第2の意味構造が生成されるので、ディコーディングは消費の局面であると同時に生産の局面でもある。ただし、エンコーディングとディコーディングは、相対的自律性を有する別個の2契機であるため、第1と第2の意味構造は必ずしも同一ではない。最後に、第2の意味構造は、「フィードバック」を通じて、放送機関によるテクスト生産の過程自体に再び組み込まれる。

2.1.1.2. コードの介在と作用

このコミュニケーション・モデルにおいて注目すべきは、エンコーディング・ディコーディング 各々の契機におけるコードの介在と作用である。エンコーディングが行なわれる際に、ある特定の 文化的コードが採用され、そのコードが作動することによって、支配的(ヘゲモニー的)意味が構成され、その意味はテクストの構造の中に刻印される。他方、ディコーディングの過程では、テクストの読み手によって、社会内での自分の主体位置に関連した解釈コードが選択、参照され、それに基づいて意味構成(すなわち読解)が行なわれる。エンコーディングは、ディコーディングの際

^{3) 2.1.1.} の記述は、Hall 全体の素描的な要訳である。2.1.1.1. に関しては、特に Hall 130 の下部の図解を参考にした。

に使用されるコードの種類をア・プリオリに決定することはできない。

2.1.2. コード論

ホールは、当該論文において、コードなるものの内実について組織立った説明を与えているとは 言い難い。

2.1.2.1. コードの諸定義

ジョン・フィスク (John Fiske) とジョン・ハートリー (John Hartley) は,共著『テレビを読む』 (*Reading Television*) の中で,コードについて簡潔に次のように説明している。

In our discussion of paradigms and syntagms, we have begun to show how signs can be organized into meaningful systems, or codes. Indeed, at its simplest, a code may be defined as a 'vertical' *set* of signs (paradigm) which may be *combined* according to certain 'horizontal' *rules* (syntagm). To this very basic definition we must add the fact that the signs which comprise the set and the rules for combining them must in some way be agreed upon among the members of the culture for whom that code communicates. (59)

アンドルー・エドガー (Andrew Edgar) によるコードの定義 "A signifying code is a set of culturally recognised rules that guide the way in which a **text** may be read. The code will determine the material from which significant units can be selected (see **paradigm**) and the manner in which selected units can be meaningfully combined (see **syntagm**)." (69) は,さきの説明の延長線上で理解することができる。要するに,コードとは,「テクストの読み方を手引きする,文化的に認知された規則の集合」のことである。そして,我々は,文化的生産物,社会的実践及び制度さえも「テクスト」として「読む」ことができる(Turner 81)。

2.1.2.2. コード概念の拡張

コードの定義をさらに拡張して用いることも可能である。浅見克彦は、「意味形成のコードとイデオロギー」をテーマとする一節で、次のように述べている。

CS [カルチュラル・スタディーズ] のコミュニケイション分析の核心は、そこでの意味構成のあり方を、その構造的基礎である言説の文化的コードに焦点を定めてとらえる点にあるといってよいだろう。

マス・コミュニケイション研究の観点からすれば、このコードのありようが当然にも問題となる。だがホールは、その構造について多くを説明してはいない。おそらくそれは、言語に比するなら、単語のように世界に存在する事柄を区別的に認知するレベルのコード、命題のように事柄の結合を描写するレベルのコード、そして物語のように事態のありようを構造的配置において提示するレベルのコードなど、多層的に存在するように思われる(視覚的メッセージのコードにも同様の階層構造を見いだすことができる)。(42-43)

このように、コードの概念を敷衍して、世界認識・解釈のための社会的に共有された慣習的な準拠 枠として機能するものとして考えることもできる。

2.1.3. 意味をめぐる抗争の場としてのマス・コミュニケーション

2.1.3.1. 3 つの読解コード

2.1.3.1.1. テクストの多意味性とコードの分類

エンコーディングにより、メディア・テクストに優先的意味 (preferred meaning) が付与されるとはいえ、記号として多意味性 (polysemy) を有するテクストは、制約を伴いつつも、ある程度まで多様な意味に対して開かれている。

コードの分類・整理は、種々の領域・レベルの観点から可能である。ホールは、前掲論文において、ディコーディングの実践という視座から、3つの仮説的なコードあるいは位置=立場(position)を措定した。それらは、支配的一へゲモニー的コード(位置)、交渉(折衝)的コード(位置)、対抗的コード(位置)の3つである。

2.1.3.1.2. 支配的コード

支配的一へゲモニー的コード(位置)に関して、ホールは以下のように述べている。

The first hypothetical position is that of the *dominant-hegemonic position*. When the viewer takes the connoted meaning from, say, a television newscast or current affairs programme full and straight, and decodes the message in terms of the reference code in which it has been encoded, we might say that the viewer *is operating inside the dominant code*. This is the ideal-typical case of 'perfectly transparent communication' — or as close as we are likely to come to it 'for all practical purposes'. (136)

つまり,支配的一へゲモニー的コード(位置)にあっては,優先的意味を受け入れるディコーディ ングが行なわれる⁴⁾。

2.1.3.1.3. 交渉的コード

次に, 交渉的コード(位置)について, ホールは以下のように記している。

The second position we would identify is that of the *negotiated code* or position.... Decoding within the *negotiated version* contains a mixture of adaptive and oppositional elements: it acknowledges the legitimacy of the hegemonic definitions to make the grand significations (abstract), while, at a more restricted, situational (situated) level, it makes its own ground rules — it operates with exceptions to the rule. It accords the privileged position to the dominant definitions of events while reserving the right to make a more

⁴⁾ ホールによる3つの仮説的読解位置(コード)を要約するに際して、Barker 271の解説を参考にした。

negotiated application to 'local conditions', to its own more corporate positions. (137)

すなわち、交渉的コード(位置)は、ヘゲモニー的なものの正当性を抽象的には認めるけれども、特定の個別具体的な部分では、固有の解釈を促す。ホールは、交渉的コードの例として、インフレ克服のため賃金引き下げを要求するヘゲモニー的定義を大枠で認めながらも、職場では賃上げを求めるストライキに進んで参加する労働者を支配するコードをあげている(137)。

2.1.3.1.4. 対抗的コード

さらに、対抗的コード(位置)については、ホールは次のように説明する。

Finally, it is possible for a viewer perfectly to understand both the literal and the connotative inflection given by a discourse but to decode the message in a *globally* contrary way. He/she detotalizes the message in the preferred code in order to retotalize the message within some alternative framework of reference. This is the case of the viewer who listens to a debate on the need to limit wages but 'reads' every mention of the 'national interest' as 'class interest'. He/she is operating with what we must call an *oppositional code*. (137–38)

要するに、対抗的コード(位置)においては、読み手は優先的意味を理解するが、それを拒絶し、それとは反対の読みを行なう。

2.1.3.2. 「意味形成の政治」あるいは「言説における闘争」

勿論,これら3つの立場は、メディア・テクストのディコーディングに特徴的な3つの傾向性を、分析上の目的のために仮構的に区分したものであり、実際には離散的で不連続な立場ではない。それらは、部分的に重複しており、また競合している。

この点に関連して、ホールは、"One of the most significant political moments... is the point when events which are normally signified and decoded in a negotiated way begin to be given an oppositional reading. Here the 'politics of signification' — the struggle in discourse — is joined." (138) と述べている。しかし、「意味形成の政治」あるいは「言説における闘争」が行なわれるのは、交渉的位置と対抗的位置の間の境界線においてだけではない。ディコーディングの位相それ自体が、またエンコーディング/ディコーディングを含むマス・メディアのコミュニケーション過程全体が、社会的意味をめぐる抗争の場として捉えられるのである。

2.2. 映画メディアのコミュニケーション

2.2.1. エンコーディング/ディコーディング・モデルの応用

ホールのエンコーディング/ディコーディング・モデルは、テレビの言説(特に、ニュースや時事番組)に関わって提示されたものであるが、修正・発展により、種類の異なるテレビ・テクストや他のメディアにも適用が可能であろう。デイヴィッド・モーリー(David Morley)は、このモデ

ルについて、"... given the hierarchies of discourse routinely offered by fictional texts, usually centring around the point of view of one or more privileged character(s), it is clearly possible to transpose the model to the analysis of the classical realist text and its derivatives in the fictional realm..." (21) と述べているが、本論文では、当該モデルを映画メディアのコミュニケーション(特に、そのテクストのディコーディング)の分析に応用する。

2.2.2. 映画テクストのエンコーディング

映画制作機関が、技術的インフラ・生産関係・知識の枠組み等に条件付けられて映画制作(エンコーディング)を行なう際、諸々の人的資源(個人主体)が動員され、特定の文化的コードが参照され、依拠される。人的資源とは、キャスト及び監督・脚本・製作・撮影・音楽・美術・編集等に関わるスタッフのことである。製作者サイドは、コードに準拠しつつ世界を解釈し、自己の意味(概念、イメージ、感情等)を、記号内容(シニフィエ)として記号表現(シニフィアン)へと託し、さらに各々の記号を組み合わせて複合的記号を生成させ、より複雑な意味を持たせる。映画メディアのテクスト制作には、通常視覚的記号(映像、文字等)と聴覚的記号(せりふ、効果音、音楽等)が用いられる。

2.2.3. 映画テクストの流通とディコーディング

エンコードされた映画テクストは、シネフィルム、ビデオテープ、DVD等の物質的媒体に乗って流通し、劇場等の公共空間や家庭等の私的空間で視聴行動が行なわれる。視聴環境がディコーディングに及ぼす効果の問題は、本稿では考察の対象とはしない。また、映画を字幕版・吹き替え版等の翻訳版で視聴する場合には、翻訳や要約の影響の問題が生じてくる。

階級・ジェンダー・人種・エスニシティ等の社会的属性,政治的・宗教的帰属等の文化的な志向・ 忠誠,及びその他の数多くの要因により重層的に決定された動態的なアイデンティティを有する主体(行為体)は、状況のコンテクストの中で、自らの経験を持ち寄って、映画テクストのディコーディングを行なう。エンコーディングから相対的に自律したディコーディングの過程では、特定のイデオロギー的コードに依拠しながら、シニフィアンからシニフィエが解読され、読み手側の意味が構成され、生産される。

3. 『司祭』をめぐる諸問題

- 3.1. 『司祭』とその制作者
- 3.1.1. 映画テクスト『司祭』

3.1.1.1. テクストの明示的・暗示的意味

本論文では、分析・検討の対象となる映画テクストとして、『司祭』(Priest) を取り上げる50。

^{5) 『}司祭』の日本公開時に発行された『シネマスクエア・マガジン』6 には、本映画(日本語字幕版)について、「BBC フィルムズ製作 / 1994 年 / イギリス / カラー / ヴィスタサイズ / ドルビーステレオ / 1 時間 49 分 /

この映画は、現代イギリスのリヴァプールを舞台にして、若い新任司祭グレッグ・ピルキントン (Greg Pilkington)が、聖職者仲間、教区民、同性の恋人などとの人間関係の中で、主として信仰上の問題で価値観の葛藤や精神的苦悩を経験しながら、人生や自己についての認識を深めていく様子を描いている。しかし、これらのことは、むしろストーリーに属することで、どちらかと言えば、テクストの明示的意味である。

それでは、エンコーディングの過程で、制作者側により込められた本テクストの含意(暗示的意味)は何なのか。人間は、聖職者を含めて皆誘惑に弱く、偏見を持ち、罪を犯しがちであるが、罪を憎んで人を憎まず、相互の憐れみと赦しこそ肝要であるというメッセージを、なるほどテクストから読み取ることはできる。しかし、人間としての、少なくともキリスト教徒としての、愛と寛容の訴えを読み取るだけの読解は、このメディア・テクストを脱文脈化して抽象化し、その「政治的」含意を過小評価しているようにも思える。

3.1.1.2. カトリック教批判と教会側の反応

ここで、このテクストが、現代のカトリック教会を主たる舞台とし、その聖職者と信徒の直面する諸問題を扱っていることの意味を問わねばならない。直接的には自分の解任のされ方に恨みを持った老司祭が、キリスト磔刑像を抱えて司教館のガラス窓に突撃する冒頭近くの場面によってその基調の一端が決定される本映画では、カトリック教の信仰・道徳・規律・教会機構等の一部に対して深刻な問題提起がなされていると考えられる。これらの問題提起は、ある立場から見れば、カトリック教会の現体制に対する批判とも受け取れる。『司祭』の「映画パンフレット」は、本映画に対するカトリック教会側の反応を次のように紹介している。

1995 年、全米でカトリック教会から強硬な抗議の声が上がった。ある一本のイギリス映画の公開中止を求めるカトリック連盟は、ボイコットの CF をテレビで流し、メディアをも巻き込んだ猛烈な反撥を起こした。そして、その運動はついに、ローマ法王が抗議の声明文を発表するにまでおよび、CNN やニューズウィークで特集が組まれるなど、論争の的になった。その結果、配給を担当したミラマックス社は全米の公開を4月15日(イースター直前の金曜日)から19日に延期することを余儀なくされた。(『シネマスクエア・マガジン』8)6

日本語字幕:細川直子/原作:徳間書店刊/配給:セテラ」の記載(無署名)がある。『司祭』の解釈に当たっては,この「映画パンフレット」を参考にした。なお,実際の分析対象となる本映画のテクストとしては,日本で出版された DVD 版『司祭』を用い,あわせてアメリカで出版された DVD 版 Priest も参照した。また,この映画の脚本に関しては,BBC フィルムズの好意により,脚本担当の Jimmy McGovern によるタイプ・スクリプト(タイトルは "PRIEST",日付は 26.10.93)のコピーを入手し,精読する機会を得た。勿論,脚本家のタイプ・スクリプトと完成した映画との間には,台詞・場面設定等の点で,異同が少なくないが,シナリオの存在は,本映画の理解,分析等において大いに助けとなった。さらに,実川訳『司祭』も参照したが,これは映画『司祭』の脚本を基にしたノベライゼーションであり,厳密に言えば,原作の翻訳ではない。同書に関しては,特に「訳者あとがき」(265-70)を参考にした。

6) 引用箇所は「解説」(8) の中の一節であるが、この記事に署名はない。アメリカ以外の国々では、『司祭』に対する反応は必ずしもアメリカと同様ではなかったようである。無署名記事 "The Business" は、次のように注記している。 "'Priest', which was condemned by conservative Catholic groups in the US (almost none

3.1.1.3. 問題提起のアジェンダ

本映画テクストにおけるカトリック教に対する問題提起のアジェンダの中で特に顕著なのは、聖職者の独身制 (celibacy)、同性愛 (homosexuality)、及び告解 (confession) の秘跡の制度 (特に、司祭によるその秘密厳守)の問題である 7 。また、告解の守秘義務に関連して、信徒によって行なわれている児童虐待 (親による性的虐待) (child abuse)・近親相姦 (incest) の問題も取り上げられている。これらのうちで、聖職者の独身制、同性愛、性的虐待・近親相姦の問題は、本質的に人間のセクシュアリティと関係がある。

3.1.2. 制作者側の批判的意図

3.1.2.1. 聖職者の独身制の問題

この映画の脚本を執筆したジミー・マクガヴァーン(Jimmy McGovern)は、自分自身がリヴァ プールのカトリック教徒の家庭に生まれ、カトリックの学校で教育を受けて育った。彼は、現代に あってもなおカトリック教会によって護持されている性にまつわる旧態依然とした抑圧的な態度や 教えに対して批判的である。

彼は、『アイリッシュ・タイムズ』(*The Irish Times*)紙のインタビューに応えて、"There's an ongoing debate in the Catholic church now that there's a shortage of young men entering the priesthood because priests are not allowed to marry." (Dwyer 13)と語り、聖職者の独身制を俎上に載せ、現代社会におけるその意義について疑問を呈している。

3.1.2.2. 同性愛(者)の問題

次に,同性愛に関するカトリック教会の教義(教理)について,マクガヴァーンは以下のように述べている。

If you have a woman they [the Catholic Church] can accommodate that — as long as you're not the Bishop of Galway, then you fuck up in a big way. But to have a man... The Catholic ideology says that to have an ongoing homosexual relationship is to live in a state of permanent sin. A casual homosexual encounter can be forgiven, but if you're a practising homosexual you're a sinner. That kind of ideology at the same time as AIDS was sweeping the homosexual community and common sense said find one partner and stick to it — it's just too much. (Ogle 24)

ここでは、いまだに同性愛(行為)への禁忌の強いカトリック教における同性愛者への偏見と差別が、リベラルで人道的な見地からは勿論のこと、現実的・実利的な観点からも問題にされ、批判されている。

of whom bothered to see the film) was, by contrast, a huge success in the overwhelmingly Catholic Republic of Ireland, where it was even on occasion recommended from the pulpit as a sensitive treatment of a difficult but important subject."

⁷⁾ これらの3点に関する補足的説明については、論文本体の後に付した補論(補遺 A)を参照されたい。

他方,主役のグレッグを演じた俳優ライナス・ローチ (Linus Roache) は、自分の役柄に関して、"I looked back and thought of a man who grew up and realised he was gay and because the whole of the world and society and the faith he's chosen to follow is saying 'Hey, this is bad, this is sin,' that he's had to run and hide from it. That's the tragedy." (Ogle 24) と語っている。グレッグの悲劇は、自分が同性愛者であるにもかかわらず、同性愛を悪であり罪であると信じているところに発すると、ローチは考えている。その意味では、同性愛に関するカトリック教の教理の責任は重大である。

さらに、マクガヴァーンによれば、カトリックの聖職に就く若者たち(の不足)の問題は、ある点で同性愛の問題ともつながっている。彼は、"Quite a lot of the young men who do become priests are gay — not gays who have come out and have come to terms with it, but men who see their homosexuality as some kind of affliction." (Dwyer 13) と述べているが、もしそうだと すれば、カトリック教(会)における同性愛(者)への偏見と差別は、先述の観点からのみならず、カトリック教会組織の維持・存続の見地からも、問題化され、是正されなければならないだろう。

この映画を以上のようなコンテクストの中に位置付けることによって、先輩のマシュー・トーマス (Matthew Thomas) 神父とグレッグが独身制と同性愛に関して味わう個人的苦悩の社会的意味がより明確になり、カトリック教の規律・道徳等の中の問題点が一層浮き彫りとなる。

3.1.2.3. 告解及びその他の問題

告解の秘跡の制度は、さらに微妙な問題である。告解とその守秘のテーマは、マクガヴァーンが長らく暖めてきたものであるらしい(Dwyer 13)。カトリック教会法により、司祭は、告解の際に知った告白内容に関して、その秘密を厳守する重大な義務を負っている。『司祭』においては、告解の守秘義務は、いかなる場合にも遵守されねばならない絶対的真理であるとする形式主義的立場に、疑念が投げかけられているようである。さらに、1人の少女を性的虐待から救うことすらできない告解の制度自体の意義が、今一度問われなければならないだろう。

その他,カトリック教(会)における権威主義,形式主義,偽善,聖職者の出世主義等が,本映画では取り上げられ,問題化されている。

以上のように、現在のカトリック教のあり方に対する批判的諸要素が、この映画テクストの意味 構造の中に織り込まれ、刻印されている。

3.1.3. 親カトリック教的側面

しかしながら、この映画が、カトリック教全体を否定するために制作されたと考えるのは的外れであろう⁸⁾。

⁸⁾ 映画『司祭』について、監督のアントニア・バード(Antonia Bird)は、「私は人々を逆上させようと意図したのではなく、議論を起こそうと考えて映画を作った」と語り、主演のローチは、「カトリックの信仰を否定・攻撃する映画ではない。ちゃんと映画を見た人ならわかるはずだ」と述べているという。これは、実川元子

3.1.3.1. 脚本家の執筆態度

マクガヴァーンは、自分とカトリック教との間の単純に割り切ることのできない関係について、"I went through that classic thing when you're around 14 or 15, as the things you loved all your childhood you turn to despise with every nerve in your body. And as you get older you come back to it and realise that there were things of value there." (Dwyer 13) と語っている。彼は、思春期の頃に反抗期を迎え、子供時代を通してそれまで大好きであったカトリック教の教えやカトリック的なものを全く軽蔑するようになり、さらに時を経るに及んで、カトリック教に回帰し、そこに価値を見出すに至った。したがって、カトリック教に対する彼の姿勢、感情等は、ある程度アンビヴァレントなものであるが、基本的には、彼はカトリック教に対して、理解、愛着、信頼感等を持ち合わせている。彼は、『司祭』の脚本において、現代社会におけるカトリック教の信仰の有効性を検証し、確認しようとしているかのようにも見える。

3.1.3.2. カトリック教への敬愛

カトリック教に対する愛や敬意を映画テクストから読み取ることは、さほど困難ではない。グレッグ、マシュー、エラトン(Ellerton)の3人の司祭の生き方と苦悩に対する同情・共感や信徒たちの多くに対する暖かく思いやりのあるまなざしは、テクストの中に明らかに存在する。特に、父親によるリサ(Lisa)への性的虐待が露顕する場面の描き方は注目に値する。ここでは、リサの苦境に関するグレッグの懊悩と神への祈りに応えて、神が奇跡の形でその恩寵を示したかのように読める。これは、カトリックの信仰に対する最大級の賛辞であろう。

3.1.3.3. 慈悲と憐れみの強調

本映画の強烈なまでに魂を揺さぶる終幕の場面について、マクガヴァーンは以下のように語っている。

あの最後の場面にいるのは、自分を罪びとと思う司祭と、おぞましい傷を負わされた少女だ。彼女は立ち上がり、彼を赦す。これこそ最も気高い慈悲と憐れみであり、聖体拝領というものだ。聖体拝領とは、裸で十字架にかけられ、傷つき、血を流し、死にかけている男の痛みを分かち合うことなのだから。それは、人類共通の慈悲と憐れみなのだ。(『シネマスクエア・マガジン』33)9)

カトリックの教会堂の中で執り行なわれる聖体拝領の秘跡において、信徒の少女が「罪」を犯した 司祭を赦すという構図は、衝撃的ではあるけれども、カトリックの精神に全く適ったものである。と いうのは、ここでは、聖体拝領の秘跡に崇高な意味が与えられ、それによって「最も気高い慈悲と 憐れみ」が示され、信者に対する神の恩寵が表わされているからである。これもまた、カトリック

[「]岐路に立つ既成宗教に衝撃をひき起こした問題作」(『シネマスクエア・マガジン』 10-11)の 11 ページ中の記述に拠っている。しかし,氏の用いた典拠と 2 人の発言の英語原文は不明である。

⁹⁾ 引用部分は、「脚本家ジミー・マクガヴァーン談 ——『司祭のことを書くのは私の使命だった』』と題する無 署名記事(32-33)からのものであり、マクガヴァーンの発言の日本語訳の英語原文は不明である。

の信仰に対する敬愛の表現であろう。もっとも、偏見や差別感情などのためグレッグを赦せず拒絶 した信者たちへの批判の含意も無視することはできまい。

3.1.4. 問題提起と登場人物の形象

制作者サイドは、エンコーディングの過程で、カトリック教という宗教に敬意を抱いてその大枠や精神を抽象的に認めながら、その多くの側面に対して問題提起を行ない、改革・是正を要求している。その立場は、言わばカトリック教(会)に対して交渉(折衝)を試みる立場である。聖職者の独身制、同性愛、告解(の守秘義務)等の検討課題は、映画テクストでは、グレッグを中心とする人々の身体・精神とそれらの間の諸関係によって表象される。両者は表裏一体の関係にある。これらの問題群とそれらに関する改革の示唆は、グレッグたちの形象を借りて初めて、具体的に説得力を持って表現できるし、他方、グレッグたちの経験する悲劇、苦悩、偏見、差別の多くは、それらの課題群がなければ、そもそも成立し得ないものである。

3.2. 『司祭』とカトリック教が優勢な社会

3.2.1. カトリック教が優勢な社会における宗教的コードと立場

3.2.1.1. カトリック教のコード

リヴァプールは、歴史的にアイルランド系住民の多い都市であり、この都市、あるいはその一部では、宗教的にカトリック教が優勢な社会が形成されている¹⁰。このようなコミュニティーにおいて、宗教上支配的(ヘゲモニー的)なコードは、カトリック教のコードである。カトリック教は、2千年余りの歴史を持つ高度に体系化・組織化された宗教であり、独特の世界観を有するが、それを下支えする準拠枠としてカトリック教のコードを想定することができる。このイデオロギー的コードによる統制は、信仰、道徳、規律、教会機構の設立・運営といった宗教的側面のみならず、信者の生活全般にまで及ぶ。このコードは、カトリック教会(カトリック教徒)の中に見られるが、特にカトリック体制派のコードであって、教権、教会組織が公式的に用いるコードでもある。

3.2.1.2. 反カトリック教の立場

権力のあるところには必ず反権力が存在する。そこで、上記のコミュニティー内に、カトリック 教のコードに対して対抗的な立場、すなわち反カトリック教の立場を措定することができる。反カトリック教の立場は、カトリック教の立場に比較的系統的に反対し、それとは対立する認識・解釈を行なう。この立場は、主としてカトリック教会(教徒)の外部に見られる。

3.2.1.3. カトリック教との交渉の立場

さらに、 当該コミュニティーにおいて、主としてカトリック教会(教徒)内及びカトリック教会

¹⁰⁾ Storry and Childs 283 には、以下のような叙述が見られる。"The north-west of England and the west of Scotland (particularly Liverpool and Glasgow) have had historically, and retain today, a distinctively Roman Catholic heritage. Liverpool is Britain's only Catholic city."

(教徒)内外の境界領域に、交渉的立場を認めることができる。この立場は、カトリック教との交渉を行なう立場であり、カトリック教の立場の正当性を大枠で抽象的には認めながらも、特定の具体的な状況下では、原則に対する交渉に基づいて、それ固有の認識・解釈を行なうのである。

3.2.2. 『司祭』テクストのエンコーディングとディコーディング

3.2.2.1. テクストの優先的意味

『司祭』のテクストは、カトリック教との交渉の立場からエンコードされていると考えられる。その際の支配的(ヘゲモニー的)意図つまりテクストの優先的意味は、以上見てきたとおりであるが、要約すれば、その枠組みや精神を基本的には否定することなしに、カトリック教を現代社会に適応させるため、敬意を払いつつ、重要な諸点で問題提起(批判)を行ない、改革・是正を訴えることである、と言うことができるであろう。重要な諸点には、聖職者の独身制、同性愛、告解(の守秘)が含まれ、他に、カトリック教(会)における形式主義、権威主義、偽善、聖職者の出世主義等を加えることができる。これらの多くは、複数の具体的人物とそれらの人間関係等によって表現され、問題提起と改革の要求は、必ずしも明示的なものではない。11)

3.2.2.2. ディコーディングの立場

今度は、『司祭』のテクストをディコードするオーディエンス(読み手)の立場を考えてみよう。カトリック教に対する交渉の立場からエンコードされる過程でテクストの意味構造の中に織り込まれた優先的意味を、オーディエンスがおおむねそのまま受け入れる、すなわち優先的読み(読解)を行なうのが支配的(ヘゲモニー的)立場である。次に、対抗的立場では、オーディエンスは優先的意味と矛盾・対立する読解を行なう。既に説明したカトリック教のコード及び反カトリック教の立場に拠る主体は、本テクストのディコーディングに際しては、オーディエンスとして主にこの対抗的立場に立つ可能性が高いと推測される。なぜなら、カトリック教のコードに依拠する者は、このテクストの優先的意味の中にカトリック教の現体制を揺るがす不穏なものを見出すだろうからであり、また、反カトリック教の立場はカトリック教自体を否定する立場なので、この立場にある人々は本テクストの優先的意味を妥協的で不充分なものとして拒絶するだろうからである。さらに、交渉的立場では、オーディエンスは優先的意味の正当性をおおよそ認めながら、部分的には独自の読解を行なう。

しかし、当然のことながら、すべての主体が「宗教的にカトリック教が優勢な社会」の成員であるわけではなく、またカトリック教のコードに通じているわけでもない。『司祭』の映画テクストをオーディエンスがディコードする立場を、仮説的におよそ3つの傾向的立場に分類したとしても、実際には、個々の主体は、様々な社会的・言説的位置から読解行為を実践しているのである。

¹¹⁾ 本稿における『司祭』テクストの優先的意味は、読み手である分析者(つまり筆者)の読解を経たものであり、筆者から自律したものではない。結局、厳密に言えば、それは仮説のひとつに過ぎない。なお、本論での『司祭』の優先的意味の導出に当たっては、特に脚本家の執筆意図を重視した。

4. 『司祭』のオーディエンス

4.1. 分析対象と読解パターン

4.1.1. 分析対象

4.1.1.1. 分析対象の設定

本論文では、映画の専門家(研究者、評論家等)ではなく一般のオーディエンス、特にキリスト教宗教圏域の一般的オーディエンスが、『司祭』の映画テクストをどのように読むかを吟味・検証するために、インターネットの WWW 上の情報を資料として利用する。分析対象としたのは、世界最大級の映画データベースである The Internet Movie Database (IMDb) 内にある "IMDb user comments for Priest (1994)" エリア(http://www.uk.imdb.com/CommentsShow?0110889 及び 0110889-18)の中の 2003 年 2 月 19 日現在の情報である。このエリアには、IMDb の無料登録ユーザーたちが映画『司祭』について執筆、投稿した批評・論評が掲示されている。調査の結果、IMDb の UK サイトと USA サイトの当該エリアの内容は同一であった。

4.1.1.2. 分析対象の詳細

『司祭』に関するユーザー・コメントは、全部で38 例あり、すべて英語で書かれているが、その内容・形式・文体等の点では様々であり、コメント本文の分量も、40 語足らずのものから 1010 語余りのものまでまちまちである。各々のユーザー・コメントには、おおむねユーザー名、Eメール・アドレス、居住地、日付、要約が付記されているが、中には、ユーザー名、Eメール・アドレス、あるいは居住地の記載のないものもある。居住地に関して、国別内訳を調べた結果、アメリカ 23 例、イギリス 3 例、オーストラリア 2 例、カナダ、フランス、ロシア、フィンランド、ブラジル各々1 例、不明 5 例であった。したがって、ユーザー・コメントのほとんどは、キリスト教圏、特にアメリカを中心とする英語圏からのものである。また、日付については、最も旧いものが 1998 年 11 月 6 日付、最新のものが 2003 年 1 月 31 日付であった。ただし、居住国及び執筆時期とコメントの読解傾向との(あり得る)相関関係に関しては、考察対象とはしなかった。

本論文では、これらユーザー・コメントの読解例を、映画『司祭』というテクスト(あるいは言説)についてのメタ・テクスト(あるいはメタ言説)として、分析・検討の対象にする。本文においてこれらの読解例を指示する場合には、同データベースの "Comments index for Priest"のセクション(http://www.uk.imdb.com/CommentsIndex?0110889)で各ユーザー・コメントに割り振られている算用数字の番号で以ってする(ただし、数字を山括弧< >で括る) 12)。また、分量・内容等の面から見て、本論での考察には値しないものとして、 2 、 6 、 12 、 21 、 25 を検討対象から除外した。よって、吟味・検証に付する有効読解サンプルは、残りの33例である。

¹²⁾ 同セクションから、各ユーザー・コメントの番号、要約、ユーザー名、日付の 4 点に関する情報を抜き出し 一覧表化して、論文本体の後に、参考付録(補遺 B)として掲げる。

4.1.2. 5種類の読解パターンの導出

ホールの支配的・交渉的・対抗的立場の理論的枠組みを,全読解サンプルに適用し,分析・検討を加えた結果,次のような修正された理論的枠組みを帰納的に導き出すことができる。

まず、テクストの優先的意味をおおむね忠実に受け取る支配的立場によって行なわれるテクストの読みが優先的読解である。次に、支配的立場に対立する対抗的立場から行なわれるテクストの読みが対抗的読解である。『司祭』の映画テクストの場合、対抗的読解は2種類に大別できる。一方は、親カトリック教的立場からなされる対抗的読解であり、他方は、反カトリック教的立場からなされる対抗的読解であり、他方は、反カトリック教的立場からなされる対抗的読解であり、これら2つの読解は、優先的読解を中心にして対極的位置にある。それに応じて、交渉的読解も2大別される。1つは、支配的立場と親カトリック教的対抗的立場を媒介する交渉的立場から行なわれる交渉的読解であり、もう1つは、支配的立場と反カトリック教的対抗的立場を媒介する交渉的立場からなされる交渉的読解である。ピーター・ブルッカー(Peter Brooker)は、"A reader or viewer who neither straightforwardly accepts nor opposes an encoded hegemonic meaning will operate within what Hall terms a 'negotiated code'."(172)と述べているが、ここでは、ブルッカーにならって、「交渉的」という用語の意味を、ホールのさきの定義より拡大して用いることにする。

以下では、これら5種類の読解パターンを、実例に即しつつ、吟味・検証する。

4.2. 『司祭』読解例のテクスト分析

4.2.1. 優先的読解

4.2.1.1. 優先的読解の概略

優先的読解とは、オーディエンスが『司祭』テクストの優先的意味を概略そのまま受け入れる読みである。この読解を行なっているのは、具体的には<5>,<11>,<27>,<30>,<32>,<34>,<35>であり、それらは読解例全体の38 例中7 例(全体の2 割弱)を占め、有効サンプル33 例中では、その2 割強に当たる。

4.2.1.2. <11>, <27>, <30>の読解

<11>,<27>,<30>は、『司祭』におけるカトリック教への問題提起のアジェンダを具体的に明示し、テーマの所在を指摘している。

 \dots whether you agree with its stance or not, kudos to the movie for taking a plethora of tough subjects like homosexuality, religious guilt, incest and life on earth vs. life in heaven, and dealing with them in a mature and often compassionate manner. $\dots < 11 >$

... Father Greg Pilkington... finds his sexual orientation conflicting with his religious faith. The film raises many issues, making the question of celibacy only one of many points. There is also hypocrisy, homophobia, shame, incest... it runs the gamut of emotions. <27>

This is not just a film about a gay priest, although that element is superbly handled. It also tackles the problems associated with any institutional religion (including the love-hate relationship of its adherents); paedophilia; confession and confidentiality etc. The plot works well, and the aforementioned themes are brought in with subtlety. <30>

さらに、<11>は、テーマの提示のされ方に関して、"Regardless of your take on the issues, I think you have to admire that they are being presented, not just talked about, and the film does an excellent job of balancing both the potential enormousness of the questions it raises, and the intimate, personal nature of its story." と記している。<11>は、問題の諸主題が、グレッグ等の生身の人間たちが絡み合うストーリー展開の中でこそ、具体性を持って説得力豊かに表現できることを正確に理解している。また、<27>は、"The film ends with a beautiful example of forgiveness and empathy." と述べ、最後の場面における「赦し」と「共感」の重要性に注目する。

4.2.1.3. <5>, <32>, <35>の読解

<5>,<32>,<35>は、問題提起のアジェンダの諸項目を、独身制・同性愛・告解の守秘等のようには概念化していないが、問題群の存在を認識し、指摘している。ここでは、比較的具体的な例として,<5>の一部を引いてみよう。

This movie shows the torment of priests who want to love and make love like "normal" human beings. It also has a focus on the contradictions of the Bible. Father Greg is prejudiced against himself, while Father Matthew is a bleeding-heart liberal, wanting to create changes in the Church.

引用の第1文は、聖職者の独身制の問題点を、また第3文の前半は、同性愛者への偏見と差別を意味していると考えられる。さらに、第3文の後半では、脚本家の意図の一部を分有する重要な視点人物であるマシューの持つ教会改革への志向が特筆されている。

4.2.1.4. <34>の読解

<34>は、『司祭』の主人公グレッグを、"a young, idealistic Roman Catholic priest in a working-class Liverpudlian parish who is struggling to reconcile his homosexuality with his vow of celibacy." と規定し、特に同性愛と独身制の問題に着目している。<34>は、さらに踏み込んで、同性愛については、"Self-affirming gay and lesbian people who grew up in the Roman Catholic Church will likely find this film sensitive and caring in its portrayal of human suffering."と述べ、独身制に関しては、"I think a strong argument is made here for the abolition of a celibate clergy..."と語り、それぞれ同性愛者の解放と独身制の廃止の主張の含意を読み取っている。また、<34>では、"Those who will brook no criticism of the Church of Rome will howl at this film..."及び"As far as the commentary that this film is bigoted against the Roman Catholic church, I disagree wholeheartedly..."と述べられており、カトリック教(会)の現状の一部に対

して、善意から建設的な批判的提言を行なうという本映画の交渉的立場が理解され、支持されていることが分かる。

優先的読解にあっては、総じて『司祭』に対して好意が示され、映画としてのその価値が高く評価されている。

4.2.2. 親カトリック教的対抗的読解

4.2.2.1. 親カトリック教的対抗的読解の概略

親カトリック教的対抗的読解は、オーディエンスが、親カトリック教的立場から、『司祭』テクストの優先的意味を拒絶し、それとは反対の読みを行なう読解である。ここでの親カトリック教的立場とは、オーディエンスとテクストとの相互作用により、オーディエンスの側に仮構的に構築される立場をも含み、必ずしもオーディエンスがカトリック教徒であることを意味しない。この読解を行なっているのは、<3>、<13>、<19>、<20>、<29>、<33>、<38>であり、全38例中7例(全体の2割弱)を占め、有効サンプル33例中2割強に相当する。

4.2.2.2. <13>, <19>, <20>, <29>, <38>の読解

<13>,<19>,<20>,<29>,<38>では、当該映画テクスト全般に対する苛立ち、嫌悪、嘲笑等が示され、敵意を持って優先的読み(意味)が拒否され、対抗的読解が試みられている。

最も長文で熱のこもった<20>を中心に分析してみよう。<20>は、マシューを "seasoned transgressor", グレッグを"a total hypocrite"と表現し、自分が矛盾点・疑問点と見做す多くの箇所を、 テクストの中に指摘する。例えば,グレッグとグレアム (Graham) が出会ったばかりでお互いをよ く知りもしないのに恋愛関係に陥っているかのようにほのめかす状況設定の不自然さが問題にされ る。また、グレッグの同性愛と独身の誓いへの違背について、<20>は、"If he already knew he was gay, and needed to act upon it, why remain in the priesthood?... Why even go into the priesthood?"と問い、カトリック教会組織(教権)側の論理を用いて、グレッグの司祭としての資 格に疑問を呈している。ここでは,映画の中で示されている,聖職者たることへの神からの召命に 対するグレッグの強い自覚・信念は無視されている。同様に、<13>もまた、"What is this so-called priests problem. He picks and chooses the vows he is going to uphold." と述べ、組織の立場に 立って、特に独身の誓いの問題性を否定している。さらに、<20>は、"And his surrender to the conformity of the confessional in the face of saving Lisa from abuse doesn't jibe with his unabashed reveling in breaking the celibacy rule." と記し、グレッグによる告解の守秘義務の墨 守と独身制への違反との間に矛盾を見出す。この意見は、<13>と<19>にも共有されている。加え て、<20>では、終幕の場面について、"The film ends with a ridiculously sentimental redemption scene in the church."と述べられ、そこでの「救い」の感傷性が愚弄され、その真正さが疑問に付 され、共感が拒否されている。<19>も、"The conclusion is laughably bad."と語り、この点につ いて, 同様の反応を示している。

結局、<20>は、『司祭』を "a rabble-rousing, offensive new feature film" と規定し、総体的に次のような評価を下している。

Sickeningly smarmy, with unappealing, unconvincing characters and situations, the film is almost a textbook case of the forsaking of craft, aesthetic sense, and love for humanity in favor of an imperceptive, sensationalistic, vulgar, divisive exercise in liberal politics and unnecessary trouncing on a religion which is still real for many people in the world.

これは、テクストの優先的読み(意味)とは大きく異なる対抗的読みに基づいた、ほとんど全面否定に近いテクスト評価である。<13>,<19>,<29>,<38>も、本映画の価値評価に関して、極めて辛辣で否定的である。

特にカトリック教に関わって、<20>は、"It can be said that Roman Catholicism has certain very real, outmoded, often crudely repressive moral restraints, but the positive aspects of the religion still hold significance for many people in the world, and this film disavows this and incites pointless controversy." と考えている。さらに、<20>は、この映画を"a vicious gob of spit which has a calculated trajectory, straight into the face of Catholicism" と喩えている。これらにおいては、本映画に内在する親カトリック教的な諸要素が無視あるいは過小評価され、この映画テクストのカトリック教に対する交渉的立場が、対抗的立場にすり替えられて解釈されている。<13>も、『司祭』は、"a stinging indictment on the 'medieval' practices of the Catholic church" あるいは"a super-secular movie industry nose-thumbing to all things religious" であると述べ、<38>も、『司祭』について、"This tiresome bit of propaganda is strictly for those who like their drama with one-note predicability and and [sic] a glaring bit of anti-Catholic bigotry to boot." と断定している。これらの読解例の本映画への強い否定的評価は、それらがこの映画を反カトリック教的あるいは反宗教的と見做していることと深く関係しているであろう。

また、<20>は、『司祭』の制作者側の制作態度を、"their lofty、imbecilically seditious、fanatically P.C. approach" と呼び、いわゆる「政治的公正=反差別」(political correctness)の立場に嫌悪感を顕わにする。『司祭』に関して、"It compartmentalizes people on the basis of their beliefs、which is totally reprehensible." と記されているところから見て、<20>は、本映画の「政治的に公正な」立場の頑迷・偏狭性と見做されるものが、却って一部の人々(特に、カトリック教徒)を差別する結果を招いていると考えているようである。「政治的公正」あるいはその見せかけに対する侮蔑感は、<13>と<29>でも表明されている。

他に注目すべきは、<19>が、"... what the child molester said in the confessional was not a confession and was therefore not confidential." と述べ、告解の秘密厳守に関する問題提起を無効化しようとしている点であろう。しかし、問題となっているのはリサの「告解」であって、父親のそれではない。

4.2.2.3. <3>の読解

<3>では,前掲の一群の対抗的読解とは異なり,敵意があまり感じられず,むしろ冷静に,時に

冷笑的に論評が展開されるが、その読解の内実は、おおむね対抗的である。<3>は、『司祭』の好演、善意、及び最後の場面の感動性を認めはするものの、他の数多くの点について、疑義を呈し批判的見解を示している。ここでは、少数の点のみ紹介する。

まず、<3>は、"It's true, as Father Mathew [sic] says, that the rule of celibacy is man made." と言い、聖職者の独身制は神が定めたものではなく人間が作ったものであることを認めるが、"But, well, nobody is twisting anyone's arm and forcing them to become a priest." と付け加え、人は自発的に独身の誓いを立てて司祭になるのだから聖職者の独身の制度それ自体に欠陥はないとするカトリック教会組織の側のロジックを擁護する。この論法は、さきの<13>と<20>が用いたものと同じである。また、カトリック教権の指導部に好意的な立場に立って、"It would have been interesting to have someone in a position of authority who had some understanding and some brains." と記し、司教等の描き方に不満を呈している。告解の問題に関しては、<3>は特にリサの父親の「告解」を取り上げて、"It's not a confession, it's a scolding and a threat. Therefore, it is not, de jure, bound by secrecy." と述べ、司祭に課せられている告解の守秘の問題性を認めることを回避する。だがこの理屈は、<19>の場合と同様、議論のすり替えである。さらに、カトリック教における同性愛への偏見・差別の論点については、<3>は完全に沈黙を守っている。

4.2.2.4. <33>の読解

<33>は、親カトリック教的対抗的読解を行なう読解サンプル群の中にあって、孤立した特異な傾向性を示している。この読解例は、同じく親カトリック教的立場に拠りながら、他とは全く異なったテクスト解釈を生み出している。

この映画に好意を持ち、その価値を高く評価しながら、<33>は以下のように論じる。

A wonderfully shot, masterfully told tale of the mystery of God's grace in the Roman Catholic religion. The film tells a tale of God's grace, the fallibility of all humans, and the fact that humans are not privvy [sic] to the inner workings of the divine, but that those workings are always in accordance with the teachings of Christ.

ここでは、映画テクスト中の「奇跡」や「赦し」及びカトリック教に関するその他の肯定的側面が過大評価され、テクスト全体が、カトリックの神の恩寵の物語として領有=転用(appropriation)されている。この読解例は、テクストが制作された際のカトリック教への交渉的立場を親カトリック教的立場に置き換え、テクスト内のカトリック教への批判的要素を無視し、カトリック教に関する改革・是正の問題提起を無効化している。つまり、<33>は、制作者サイドの意図すなわちテクストに埋め込まれた優先的意味の枢要な部分に対立する、もの静かではあるが頑固な対抗的読解なのである。ここにあっては、『司祭』の映画テクストは、専らキリスト教の信仰を擁護・強化するための具として使われているかのようだ。これは、一種のテクストの意味の私物化であり、他の目的へのテクストの転用である。

要約すれば、親カトリック教的対抗的読解にあっては、少数の例外を除いて、おおむね『司祭』に

対して敵意が示され、その価値への評価は否定的である。また、その読解例の多くには、党派性が 見られる。

4.2.3. 親カトリック教的交渉的読解

4.2.3.1. 親カトリック教的交渉的読解の概略

親カトリック教的交渉的読解は,支配的立場と親カトリック教的対抗的立場を媒介する交渉的立場からなされる読みであり,優先的読解と親カトリック教的対抗的読解とを媒介するものである。ここで言う親カトリック教的とは,仮構的なものも含み,また相対的な概念である(4.2.2.1.8)。優先的読解と親カトリック教的対抗的読解の間では,テクストの意味をめぐる綱引きが演じられているが,この親カトリック教的交渉的読解にあっては,テクストの優先的意味と対抗的意味とが,交渉(折衝)を通してせめぎ合う。この読解を行なっているのは,<1>, <4>, <7>, <8>, <9>, <15>, <16>, <22>, <23>, <24>, <26>, <28>, <31>, <36> であり,全38例中14例(全体の4割弱)を占め,有効例33例中4割強に当たる。

親カトリック教的交渉的読解に分類される読解例は、多様性に富んでいるが、説明の便宜のため、 ここでは幾つかの共通点のあるグループに分けて議論を進めることにする。

4.2.3.2. <1>, <9>, <22>の読解

まず、<1>、<9>、<22>は、 テクストの優先的意味を大枠で認めながら、部分的に独自の読みを実践している。

<1>は,『司祭』に対する鑑賞態度に関わって,"To really appreciate this movie, one has to have been in the position (antique for me now but the memories are there) of loving a belief system and an institution and all the smells and bells and at the same time finding it cynically unwelcoming and compromised." と述べている。ここにおいては,カトリック教に愛や敬意を抱いてその大枠や精神を抽象的に認めながらも,その多くの側面に問題提起を行なうという,この映画のカトリック教への交渉的立場の微妙さが正確に理解されている。その上で,<1>は,"The big flaw in the plot is that there is no seal on the confessional when one confesses oneself the victim rather than the criminal." と書き,(自分流の)技術的法解釈の観点から,本映画で提起されている告解の守秘義務の問題性を否定する。映画テクスト全体に対する評価も,"Flawed but fascinating drama" とアンビヴァレントである。

<9>は、この映画の中に唯一の誤りがあるとして、"Roman Catholics believe that, after a person is given absolution, the priest is allowed to speak out about what has happened to the girl." と記し、<1>とやや異なった観点から、告解の守秘義務に関する問題提起に疑問をさしはさむ。しかし、<9>は、"It [the mistake] sort of defeats the purpose and the turmoil he goes through..."としながらも、"... if you ignore that little part... then the movie is absolutly [sic] magnificent."と結論付けている。

また, <22>は, 本映画を "a drama which provokes thought on a number of issues" と規定し

つつ, "Problems stemming from physical v.s. [sic] spiritual matters is [sic] considered in 'Priest'." と述べ, 『司祭』における肉と霊の相克の問題に注目している。<22>は、全体的に好意的で、映画そのものを"A most absorbing and challenging presentation"と高く評価している。

4.2.3.3. <4>, <7>, <8>, <16>, <26>, <28>, <31>, <36>の読解

次に、<4>、<7>、<8>、<16>、<26>、<28>、<31>、<36>から成るグループは、『司祭』における人間個人の内面性・精神性を重視する傾向が強く、信仰(心)、倫理性、道徳等の側面に顕著な関心を示している。その反面、これらの読解例は、社会的・制度的な要素にあまり注目せず、カトリック教(会)の改革・是正を志向しない。

4.2.3.3.1. <4>, <7>, <26>の読解

さきの一群の中で、<4>、<7>、<26>は、愛や赦しの意義を強調している点で共通性を有している。

<4>は、劈頭で、『司祭』を "very beautiful and also provocative film about faith, church, forgiveness and tolerance" と規定する。<7>も、"This is a powerful film about faith, charity and most of all, forgiveness." と、ほぼ同様である。続いて、<4>は、"The film is a powerful study about religion and many ways to interpret and obey its orders." と述べて、> 2 大解釈の宗教的枠組みを設定し、さらに "The main point is that no human is purely good and without any flaws and everyone sins, priests too." として、司祭を含めたすべての人間の可謬性、罪深さを重要視する。したがって、"The narrow-mindedness is one problem the film deals with..."とされ、結局、"... the power of love, forgiveness, and tolerance are the main themes of the film..."と結論付けられ、本映画における愛や赦しの最重要性が確認され、強調されている。

<26>もまた, "As the movie points out, we are all sinners, some more than others, but confession brings remission though not always in this lifetime." と記して,人間の罪深さや赦し に注目し,さらに "There is a lot of love in this film, and it ultimately saves Fr. Greg and everyone who watches his travails." と述べて,この映画テクストを読む上での愛の重要性を主張している。また,<26>は,カトリック教に対する本映画の姿勢について,"Some saw this as an anti-Catholic film, but the script clearly distinguishes between disparaging the Catholic religion and certain hypocritical Catholics who seem incapable of 'hating the sin but loving the sinner'." と考える。ここでは,愛の意義が確認されつつ,本映画を反カトリック教的だとする見方が否定されている。

このグループの読解は、『司祭』に対して好意的であり、その価値を高く評価している。

4.2.3.3.2. <8>, <16>, <28>, <31>, <36>の読解

<8>, <16>, <28>は、信仰の問題を中心に据えて『司祭』を論じている。

<8>は, "This film is worth watching but please be prepared to be challenged by the moral issues it raises, especially if you are Catholic." と述べて、この映画が特にカトリック教徒の道徳

的問題を提起していることを認識しつつ、映画の中で言及される "certainty of vocation" を、幾つかのテーマのうちのひとつであるとしている。進んで<8>は、"As someone praying to be of service to our Lord (and far from perfect myself) — I found the portrayal of the flawed men in the story interesting." と語り、本映画の中の不完全で瑕疵ある人間像を、自分の信仰心と結び付けようとする。さらに<8>は、次のように記している。

This film is NOT an indictment of the Catholic church or ABOUT a homosexual Priest. If you see the world in a black/white way, then this film is NOT for you. If you, however, see its greys (or other colors) and live your life focused upon God or if you are trying to be of service to him, then this movie may be of interest to you.

ここで、<8>は、この映画のカトリック教(会)に対する微妙な交渉的性格をある程度把握しながらも、人間の内面に沈潜し、真摯な信仰者にとって本映画が持つ意義を示唆している。

<16>は、<8>と同様に精神性を重視して、『司祭』を "a tense human story that involves people of faith, without slamming Christianity or anybody else's religion, for that matter" とする。ここでは、宗教それ自体に対して本映画が攻撃性を有しているという見解が否定され、信仰(者)の問題が焦点化されている。この映画がカトリック教を攻撃するものではないと主張する点では、<31>も同意見である。

<28>は,『司祭』について, "... it makes me reflect upon my own relationship with God and my religion." と述べ, 信仰・宗教の問題に注目する。その上で, <28>は焦点を絞り, "Even if you're not gay, this movie speaks directly to all of us whose true self has been (or is) in direct conflict of learned and trusted beliefs." と語り, この映画を, カトリック教と同性愛に限らず, 自分の宗教(信仰) と自己の本性との矛盾・葛藤を扱ったものとして意味付け,評価している。

<36>も,この立場に近く,本映画を"a personal and thought provoking account of one man's struggle attempting to balance his own faith against what he knows to be the truth" と表現している。この場合,例えば,"his own faith" とは同性愛に厳しいカトリック教の信仰(教義)のことであり,"what he knows to be the truth" とはグレッグが司祭たることを神が欲していることであろう。ただし,<36>は,この映画に関して,"…it does not necessarily offer a satisfactory solution to the questions it raised." と付け加えて,多少の不満を漏らしている。

これらの読解例もまた,おおよそ『司祭』に好意的であり,その価値評価は高い。

4.2.3.4. <15>, <23>, <24>の読解

さきの2つのグループ (4.2.3.2. 及び4.2.3.3. 参照) のいずれにも属さない読解例が<15>, <23>, <24>である。

<15>は、"I think the movie is a story of human xenophobia, people's paranoid reaction to something they don't or can't fully understand." と述べ、この映画は、自分がよく理解できないものに対する人間の嫌悪・恐怖・憎悪についてのものだとする。換言すれば、分からないものへの偏見・差別こそが本映画のテーマということになる。分からないものの中には、当然同性愛が含ま

れるであろう。<15>は、この映画全体については、"I like it overall...." と好意的だが、マシューと家政婦マリア(Maria)との関係に関しては、"... his marital-style relationship was a betrayal of the trust that his parish placed in him." と語るなど、幾つかの点で苦言を呈してもいる。

<23>は、『司祭』について、"... the movie shows a good representation of the soul of a homosexual who is looking for God in a religion that seems to shun him." 及び"... it had a good message, especially for gay Christians." と記し、視野を特に同性愛者のキリスト教徒に限定して、この映画を高く評価する。

<24>は,この映画について,"... this ambitious (at times overly ambitious) feature keeps us painfully aware that, like we laity in the pews, no one lives in a vacuum." 及び"... this film is a wonderful affirmation of one undeniable fact — Priests are only human." と語り,本映画から,司祭といえども人間であり,他の人々と同様,人間としての弱さを持っているという聖職者の人間性に関するメッセージを読み取っている。さらに,<24>は,自分のコメントを"Keep The Faith"と要約し,グレッグやマシューに対して好意的であり,映画全体の評価も高い。

以上のように、親カトリック教的交渉的読解においては、少数の例外的事例を除いて、おおかた 『司祭』に対して好意が示され、その価値への評価は肯定的である。

4.2.4. 反カトリック教的対抗的読解

4.2.4.1. 反カトリック教的対抗的読解の概略

反カトリック教的対抗的読解は、オーディエンスが、反カトリック教的立場から、『司祭』テクストの優先的意味を拒否し、それとは対立する読みを行なう読解である。ここでの反カトリック教的立場とは、仮設的なものをも含み、親カトリック教的立場と比較して、相対的に反カトリック教的という意味である。したがって、実際には、この反カトリック教的立場には、非カトリック教的(あるいは、広く非宗教的)な立場が含まれる。この読解を行なっているのは、<14>、<18>、<37>であり、全38例中3例(全体の1割弱)を占め、有効サンプル33例中1割近くに相当する。

4.2.4.2. <14>の読解

<14>は、『司祭』について、"Is 'Priest' anti-Catholic in its message? To an extent, yes. The Catholic's [sic] Church's unyielding, unprogressive, medieval doctrines are brought to task here...."と自問自答し、制作者サイドのカトリック教への交渉的立場をかなり正確に理解している。しかし、グレッグ、マシュー等への共感・同情を拒否し、"In fairness, 'Priest' does bring out the hypocrisy in both priests, as well as the parish. Nobody comes off saintly here, just flawed and human."と述べて、カトリック教会の聖職者・平信徒全般の偽善や欠陥に注目する。<14>は、この映画を"an important, ambitious project"であると認めながらも、"Some of the scenes come off overbaked and melodramatic, while the resolution of the piece should be more powerful and less compromising; instead it comes off manufactured and unrealistic, hurting its overall

impact."と否定的言辞を記している。特に、本映画の問題提起への解決法が、生温く妥協的であるとして批判されていることは注目に値するであろう。これは、この読解の反カトリック教的立場を示唆するものである。

それでは、<14>は、宗教や(カトリック)教会に関して、どのように考えているであろうか。

While I deem this movie to be a stronger platform for social tolerance, 'Priest' still drums home beautifully the message that organized religion is still used as a tool to govern instead of instill moral standards... and as a persecutive weapon against certain sectors of society that do not conform to those rigid standards. As a consequence, the Church has provided a comforting harbor and hazardous safety zone for certain "acceptable" bigotries.

ここでは、組織化された宗教や教会が、いまだ人間個人の幸福のためではなくて、支配・抑圧・迫害の具として用いられている実態が指摘され、現代社会における宗教・教会そのものの有効性や存在意義が疑問に付されている。

『司祭』への<14>の態度・評価は、両面価値的である。

4.2.4.3. <18>の読解

<18>は、宗教色が薄く、反カトリック教的な強い思い入れは感じられない。この読解例では、全体的に、非宗教的で作品鑑賞的な見地から主として技術的な批判が行なわれている。例えば、<18>は、グレッグが、苦しむのが自分なら告解の守秘のような教会の掟に悩まぬが、苦しむのが他人ならばそうはいかないと言っていることを指摘しつつ、他方、"While he wrestles with this dilemma and lets the girl stay in the care of an incestuous father, he breaks the vow that would cause only him to suffer, or rather, sacrifice." と述べ、グレッグの言動には矛盾があると難じている。また、他の主要な問題点として、<18>は、グレッグとグレアムの関係をあげている。映画の中では2人が恋に落ちることがほのめかされてはいるが、両者の恋愛関係が充分に展開されていないため、宗規に非常に厳格なはずのグレッグが、なぜ独身の誓いを破るような危険を敢えて冒すのかが納得できない、と<18>は批判する。さらに、<18>は、"The viewer is asked to assume that Father Greg has a very deep spiritual conviction and a calling, yet it is not effectively demonstrated."と語り、この映画の中でグレッグが有しているとされている、司祭たることへの神の召命に対する強い確信なるものの信憑性に疑義をはさんでいる。

本映画全体に関しては、<18>は、"It is entertaining enough to propel the viewer along with the story but although it threatens, it does not deliver any thought provoking, or discussion provoking material." と論じている。ここでは、その娯楽性については、一応認められているものの、この映画テクストの優先的意味の枢要に属する諸問題提起の存在そのものが否定され、無効化されている。<18>は、自分のコメントを"Great Cast, Flawed Plot"と要約しており、『司祭』に対する姿勢・評価は、アンビヴァレントである。

4.2.4.4. <37>の読解

<37>は、明快、端的に反カトリック教的な立場から、この映画を"... one of the best movies to openly challenge the hypocrisy of the world, especially that of the Catholic church." と規定する。ここでは、『司祭』の中に見られる親カトリック教的な諸要素がすべて無視され、特にカトリック教会の偽善への異議申し立てが過大評価されている。さらに、<37>は、ストーリーについて、"A very human story、cleverly depicts Father Greg's torment when he is faced with a dilemma." と述べ、本映画をあくまで人間的な見地から見て、現実的、世俗的な解釈を施している。続けて、<37>は、"The most dramatic scene is when he challenges Jesus' beliefs with his own." と記し、この映画の反キリスト(教)性さえ示唆している。

この読解は、本映画に好意的で、"Great movie"と高く買っている。

反カトリック教的対抗的読解においては、『司祭』に対する姿勢・評価の点で、アンビヴァレント なものと肯定的なものとの両方が見られる。

4.2.5. 反カトリック教的交渉的読解

4.2.5.1. 反カトリック教的交渉的読解の概略

反カトリック教的交渉的読解は,支配的立場からなされる優先的読解と反カトリック教的立場からなされる反カトリック教的対抗的読解とを媒介する読みである。ここで言う反カトリック教的とは,仮構的なものをも含み,また相対的な概念であり,ここでは,その中に,非カトリック教的(あるいは,広く非宗教的)なものを含むことにする。この反カトリック教的交渉的読解においては,テクストの優先的意味と反カトリック教的な対抗的意味とが,交渉を通じて混ざり合い,せめぎ合う。この読解を行なっているのは,<10>,<17>であり,全38例中2例(全体の5分強)を占め,有効例33例中6分程度に当たる。

4.2.5.2. <10>の読解

<10>は,『司祭』について,"It surfaces the struggles of being oneself, above the rituals of society." と述べているが,"the rituals of society" という表現は,特に同性愛,聖職者の独身,告解の守秘等についてのカトリック教会の教義・規律に関わって用いられていると考えられる。これは,その精神において,優先的読み(意味)から遠くないが,教会改革等の現実問題の実践的解決を志向せず,内面的である。また,<10>は,神,信仰,赦し,慈愛(charity)等の宗教的(キリスト教的)概念を使わずに,"For those seeking understanding and reconciliation, I highly recommend it." と語り,この映画を精神的見地から評価している。さらに続けて,<10>は,"To those who hate: Watch this. It may bring you closer to humanity." と記し,本映画を脱宗教化して,人間性をより重視している。<10>の非宗教性は,親カトリック教的交渉的読解群と本読解とを分かつものである。

<10>は、『司祭』に好意的で、"Awesome!"と高い評価を与えている。

4.2.5.3. <17>の読解

<17>は、『司祭』に関して、"This movie goes beyond the idealizing of religious people..." と述べ、本映画が宗教家・信仰者の脱神秘化を図るものだとして、かなり現実的・世俗的な観点からこの映画の解釈を行なっている。<17>は、この映画の主題について、"It really explores the deep needs、and true weaknesses of a priest、that is not a pretended superior man that just with praying or with the torture of his body is able to supress [sic] his natural needs、in this case of a [sic] physical needs、like sex is."と語っている。ここでは、本映画テクストの優先的意味の中心をなす問題提起群の一部が、表現を変えて、個人的な言葉で共感的に論じられているが、その焦点は、専ら司祭の肉体的欲求に当てられている。この読解において、カトリック司祭は、肉を備えた単なる人間として、その霊性・精神性を剝奪され、俗人と同レベルにまで格下げされて、その代わり、共感・同情の対象となるのである。この読みは、本映画にたゆたう神の奇跡・恩寵とも思しき神秘的側面には重きを置かない。さらに、<17>は、宗教家・信仰者等について、"... of course they make mistakes、even Jesus made mistakes、it is just that the church has covered them."と語っており、宗教家・信仰者、イエス、教会等の宗教的なものを、徹頭徹尾、世俗主義的・人間主義的な見地から解釈している。

<17>もまた、『司祭』に好意的で、"truly emotive"と評価が高い。

反カトリック教的交渉的読解にあっては、両例とも、『司祭』に対して好意を示し、その価値を高く評価している。

4.3. まとめと発展的考察

4.3.1. オーディエンスによるテクスト読解行為

4.3.1.1. テクストとオーディエンスの相互作用

ある社会的及び言説的位置にあるオーディエンスは、自らの経験を持ち寄って、状況のコンテクストの中で、テクストの読解行為に臨むが、その際、オーディエンスからテクストへの能動的な働きかけが行なわれるのみならず、テクストからオーディエンスにも働きかけが行なわれる。オーディエンスは、テクストなしにテクストを読解することはできず、テクストは、優先的意味が刻印された物質的に有限な記号体系(構造)として、読解の行なわれる条件と制限を押し付ける。しかし、テクストは、自律的な記号体系であり、必然的に多意味性を有するので、テクストの意味を一義的に規定することはできない。テクストの意味は、あくまで、オーディエンスとテクストとの相互作用の過程で生み出される。テクストによって課された条件と制約の範囲内で、オーディエンスは、テクストに対して自らに固有の意味付けを行なおうとするが、「意味形成の政治」が展開されるのは、まさにここにおいてである。

4.3.1.2. 『司祭』オーディエンスの読解位置

今回分析対象とした読解サンプル群は、ほとんどキリスト教宗教圏から寄せられたものであるが、

キリスト教圏の成員は、他の社会の成員に比べて、オーディエンスとして、一般的に『司祭』テクストへの比較的明確な立場が取りやすいであろう。勿論、キリスト教圏の人間といえども、敬虔なカトリック教徒やプロテスタントから不可知論者、無神論者に至るまで、宗教的立場は種々様々である。例えば、現実世界の日常生活において、カトリック教権の保守的立場に強く同一化している主体は、その比較的永続的・固定的位置から、『司祭』をおおむね対抗的に読むであろう。しかし、テクストからもオーディエンスに働きかけがなされるので、オーディエンスはテクストによって説得されてその読解位置を修正し、交渉的あるいは支配的立場から『司祭』を読むことになるかもしれない。この修正された読解位置とそこから形成された意味は、後の現実世界において主体が取る立場に影響を及ぼす可能性がある。また、例えば、現実社会においてカトリック教への比較的明確な立場を形成していない主体は、『司祭』テクストの読解に当たって、その立場を定めることを迫られる。したがって、この場合の親カトリック教的、反カトリック教的立場は、比較的仮構性・暫定性の強いものである。こうして、オーディエンスとテクストとの相互作用の中で、カトリック教への姿勢を含む読解位置が構築され、オーディエンスはこの位置から『司祭』を優先的、交渉的、対抗的に読むことになる。ここでもまた、仮設的な読解位置とそこから構成された意味は、その後の現実世界で主体が取るであろう立場を変化させ得るものである。

4.3.2. 『司祭』読解例分析の要約と考察

本論では、『司祭』の映画テクストの読解例を5種類に大別して、吟味・検証した。

4.3.2.1. 優先的読解の場合

優先的読解を行なっているのは、有効読解例の2割強であり、ここでは、オーディエンスがテクストの優先的意味を概略そのまま受け入れている。この読みにおいては、カトリック教への交渉的立場が制作者側と共有されているので、当然、総じてテクストに対して好意的であり、その価値が高く評価される。ただし、これは、テクストを通した制作者側から読み手への単純で直線的な意味の伝達などではなく、また読み手側の受動的読解でもない。オーディエンスとテクストとの相互作用の中で、オーディエンスはテクストへの意味付与実践を行なっており、その主体性、能動性は行使されているのである。

4.3.2.2. 親カトリック教的対抗的読解の場合

親カトリック教的対抗的読解を行なっているのは、有効読解例の2割強であり、ここではオーディエンスが、親カトリック教的立場から、テクストの優先的意味を拒否し、それとは対立する読みを実践している。この読みを行なう読解例の大部分は、『司祭』テクストを反カトリック教的あるいは反宗教的と見做して敵意を示し、その価値を否定的に評価する。ただし、少数の例外はある。すべての種類の読解の中で最もダイナミックな「意味形成の政治」が行なわれているのは、まさにこの親カトリック教的対抗的読解においてである。オーディエンスはテクストに強く働きかけ、傾向性の強い、多くは党派的な意味付けを行ない、テクストの意味を乗っ取って、テクストを領有=転用する。ここでは、オーディエンスが『司祭』の物語を利用して、もうひとつの別な対抗的メタ・ナ

ラティヴを紡ぎ出しているかのようである。

4.3.2.3. 親カトリック教的交渉的読解の場合

親カトリック教的交渉的読解を行なっているのは、有効読解例の4割強であり、ここでは、オーディエンスが、支配的立場と親カトリック教的対抗的立場を媒介する親カトリック教的交渉的立場から、優先的読解と親カトリック教的対抗的読解とを媒介する読みを行なっている。4割強がこの読解に分類されるのは、「交渉的」という用語の本論での定義からして、無理からぬところかもしれない。親カトリック教的交渉的読解は、多様な読解例を含むが、代表的なものとして、テクストの優先的意味を大枠で認めながら、部分的に独自の読みを試みる読解、カトリック教(会)の実践的改革を志向せず、個人の内面性・精神性を重視する読解などがあげられる。この読みにあっては、少数の例外を除いて、大体『司祭』に好意が示され、その価値が肯定的に評価される。しかし、優先的意味に対するある程度の対抗性や潜在的対抗性を有している読解例も少なくない。優先的読解と親カトリック教的対抗的読解との間では、テクストの意味の奪い合いが演じられるが、親カトリック教的交渉的読解においては、テクストの優先的意味、親カトリック教的な個別的で独自の意味、及び親カトリック教的対抗的意味が、混ざり合い、せめぎ合っている。

4.3.2.4. 反カトリック教的対抗的読解の場合

反カトリック教的対抗的読解を行なっているのは、有効読解例の1割近くであり、ここでは、オーディエンスが、反カトリック教的立場から、テクストの優先的意味を拒絶し、それとは対立する読みを試みている。この読みを行なう読解例群においては、テクストに対する姿勢・評価の点でアンビヴァレントなものの方が多いが、肯定的なものも見られる。反カトリック教的立場からなされるこの読解と次の反カトリック教的交渉的読解に分類される読解例が少なかったのは、カトリック教的(宗教的)な『司祭』の映画テクストに関心を持って視聴し、コメントを執筆、投稿するオーディエンスのタイプとテクストの意味構造側からの働きかけ等に起因しているかもしれない。

4.3.2.5. 反カトリック教的交渉的読解の場合

反カトリック教的交渉的読解を行なっているのは、有効読解例の6分程度であり、ここでは、オーディエンスが、支配的立場と反カトリック教的対抗的立場を媒介する反カトリック教的交渉的立場から、優先的読解と反カトリック教的対抗的読解とを媒介する読みを行なっている。この読みにおいては、テクストに対して好意が示され、その価値が高く評価されている。優先的読解と反カトリック教的対抗的読解との間では、テクストの意味の奪い合いが見られるが、反カトリック教的交渉的読解にあっては、テクストの優先的意味、反カトリック教的な個別的で独自の意味、及び反カトリック教的な(潜在的)対抗的意味が、混ざり合い、せめぎ合っている。

映画メディアのコミュニケーション過程全体が、意味をめぐる抗争の場として捉えられるが、ここでは、オーディエンスによるメディア・テクストの読解に焦点を絞って論じた。「意味形成の政治」あるいは「言説の闘争」は、テクスト読解の至るところで行なわれているのである。

5. 結び

5.1. 本論全体のまとめ

本論では、メディアのカルチュラル・スタディーズの立場から、映画メディア・テクストのエンコーディングとディコーディングについて考究した。

はじめに、ホールの論考を中心に据えつつも、諸家の所説を参照して、メディア・テクストのエンコーディングとディコーディングに関する理論を整理、検討した。その際、コードの問題に特に注目した。その後で、当該コミュニケーション・モデルを映画メディアに適用するために、予備的考察を行なった。

次に、具体的な映画メディア・テクストとして『司祭』を取り上げ、そのテクストとエンコーディングを分析、検討した。エンコーディングに関しては、特に脚本家の執筆意図を重視した。さらに、この検討結果と前述のモデルとを合体させ、社会的視点を盛り込んで、『司祭』のコミュニケーション・モデルについて考察した。その際、主にエンコーディングの立場と意図、テクストの優先的意味、ディコーディングにおけるオーディエンスの立場等に注目した。

本稿では、インターネット上の映画データベース内にある一般のオーディエンスによる映画批評を、映画『司祭』というテクスト(あるいは言説)についてのメタ・テクスト(あるいはメタ言説)として、考察の対象にした。まず、ディコーディングに関するホールの理論を応用、修正して、『司祭』テクストの読解に関する新たな理論的枠組みを導出した。その枠組みとは、優先的読解、親カトリック教的対抗的読解、親カトリック教的交渉的読解、反カトリック教的対抗的読解、及び反カトリック教的交渉的読解のそれである。その後で、これら5種類の読解パターンに類別される『司祭』テクストの実際の読解例を詳細にテクスト分析して、これらの読解パターンの有効性を吟味、検証に付した。最後に、オーディエンスによる『司祭』テクストの読解に焦点を当てながらも、本論全体の議論をまとめ、若干の発展的考察を試みた。その際、(マス・)コミュニケーション過程全体を、意味をめぐる抗争の場として捉える視点から、テクスト読解の局面で展開される「意味形成の政治」あるいは「言説の闘争」に注目した。

5.2. 今後の諸課題の展望

終りに、本論全体での考察の過程において見出された諸問題点のうち主要なものを、以下に列挙 しておこう。

- ① エンコーディングの契機において複数の人間主体がメディア・テクスト生産に関わっているとき,エンコーディングにおける支配的(ヘゲモニー的)意図(すなわち,テクストの優先的意味)は,どのようにして決定されるのか。
- ② 研究者は、厳密には、他のオーディエンスに対するいかなる優越的方法によって、メディア・テクストの優先的意味を知り得たと主張できるのか。あるいは、分析者がメディア・テクストの優先的意味であると考えるものは、どのような手続きを経てその特権的地位を獲得できるのか。¹³⁾

¹³⁾ これに関連した問題点は、例えば、藤田「『読み手』の発見」79でも触れられている。

- ③ ホールのコード・モデルは、認識、理解、解読、解釈、反応、意見形成等を厳密に区別せずに、一緒くたにして扱っているように見える¹⁴⁾。特にメディア研究、テクスト理論等の最近の成果から学び、メディア・テクストのエンコーディングとディコーディングに関する、より精緻なコード論を構築することが求められる。
- ④ オーディエンスによるメディア・テクストの読みの決定に関わる諸要因, それらの相対的重要性, 及びそれらの相互関係を, より明確化する必要がある。
- ⑤ メディア・テクストからオーディエンスへの働きかけを過小評価してはならない。自律的で多意味性を有するが、優先的意味が刻印されている(とされる)物質的に有限な記号体系としてのメディア・テクストを綿密に分析し、その構造を可能な限り究明することは、オーディエンス論を含むメディア・カルチュラル・スタディーズの発展にとって必須の要件である。
- ⑥ オーディエンスの社会的及び言説的位置がメディア・テクストの読みをある程度まで規定することを具体的に検証するためには、メディア・オーディエンスについての「エスノグラフィー的」研究(メディア・エスノグラフィー)の方法や知見を摂取、援用することが必要である。

今後、メディアのカルチュラル・スタディーズの立場から、メディア・テクストとその制作、読解等に関する研究を展開していく上で、これらは、決して無視することのできない諸課題である。

補遺A

ここに集録するのは、本文の論の運びからすると幾分逸脱的であり、注に含めるには分量が多過ぎる補足的解説である。主題は、カトリック教における聖職者の独身制、同性愛、及び告解の3つである。

I. 聖職者の独身制

ここでは、主として『新カトリック大事典』第3巻(以降、『大事典』と略記)の「どくしん 独身」の項目(P. ネメシェギ・濱田了;1308-14)を参照して、「聖職者の独身制」について解説する。まず、独身の「語義」に関連して、『大事典』は、「……自発的に選ばれた独身の状態は、人が婚姻適齢期にあるにもかかわらず、結婚しておらず、また結婚したことがない状態を指し、それが宗教的な動機による場合、これからも決して結婚しないことを公に決断したことを示す」(1308)とする。「新約聖書」に関わっては、「……新約聖書においては、教会の奉仕者一般に対する独身の義務づけはまだみられないが、祈りに専心するための自発的独身あるいは禁欲への要請がすでにみられる」とし、また、「宗教的な動機で選ばれる独身」に関連して、「キリスト教においては修道生活と並んで、聖職者にも独身が要求されるようになり、特にラテン教会では独身が上級聖職への叙階の前提となってきた」としている(1309)。

次に、「西方教会」での「聖職者の独身制」の歴史に関する『大事典』の記述(1310)を要約する。

¹⁴⁾ Hall において展開された「優先的読解」モデルに対する批判については、藤田「『読み手』の発見」79と Morley 21 を参照のこと。

スペインのエルビラ教会会議(300 年頃)は、叙階後の夫婦関係の継続に罰則を規定し(33条)、第1ニカイヤ公会議(325年)は、東方と西方の両教会に共通する独身制を導入する試みを論議したが、失敗した。しかし、11世紀の半ばにおいてもなお、西方諸国では聖職者の婚姻が一般的に行なわれていた。インノケンティウス 2世(在位 1130-43年)は第2ラテラノ公会議(1139年)において、司教・司祭・助祭への叙階が婚姻障害となることを規定し、ケレスティヌス 3世(在位 1191-98年)は婚姻障害を副助祭にまで広げたが、実際にそれらを遵守するには困難が多く、宗教改革における主要な争点となった。トリエント公会議は教会の規律を厳格にし、神学校における聖職者養成の改善を命じ(1563年の第24会期、9条)、この結果は全教会に及ぶことになった。第1ヴァティカン公会議でも独身制は論議され、1917年発布の『教会法典』は上級品級(副助祭以上)の聖職者の独身義務を再び確認した(132条1項)。第2ヴァティカン公会議は、妻帯者にも助祭職への道を開くことを決定し(『教会憲章』29項)、また『司祭教令』では、西方教会で築かれてきた司祭独身制を再確認した。「独身は多くの点で司祭職にふさわしい。……天の国のために守る童貞または独身によって、司祭は新しい崇高な理由によってキリストに身をささげ、分裂のない心をもって、よりたやすく主に一致し、主において、また主を通して、より自由に神と人々とに対する奉仕に身をささげ、主の国と超自然的更正のわざに身軽に仕える」(16項)。

1983 年発布の現行『教会法典』では、「聖職者の独身制」について、「聖職者は天の国のために完全かつ終生の貞潔を順守する義務を有する。したがって、神の特別の賜である独身を順守しなければならない。この賜によって聖職者は心を分かつことなく、より容易にキリストに結ばれ、神と人への奉仕にいっそう自由に献身することができる」(277条1項:『カトリック新教会法典』147)と定めている。『大事典』は、「独身制は、法的には、結婚の禁止と完全な貞潔の遵守からなる。つまり性的行為を行うこと、思いめぐらすこと、望むことについての節制である」とし、「……聖職者の独身制は、聖職の本質そのものに由来するのではなく、役務に完全に献身できるために便宜上、法的に課されたものといえる」としている(1314)。独身義務への違犯は伴事的聖職停止制裁あるいは聖職者身分からの追放の処分を受ける(『教会法典』1394条1項及び1395条1-2項)。

『大事典』は、「独身制への反対意見」を合計7種類に分類し、各々への反論を掲げているが、ここでは、紙幅の都合上、主として反対意見を紹介する。

以下,反対意見を列挙する。「反対意見の第一は,新約聖書に基づくかのように思われるものである。新約聖書は聖職者の独身制を明白には命じておらず,ただ神からの特別な召し出しに人が自由に応えるものとして示しているにすぎない。さらにキリストは十二使徒を選ぶにあたって独身を条件としなかったし,使徒たちも初代教会の上長に独身者だけを任命したわけではなかったとする」(1311)。「第二は,独身制が夫婦関係を蔑視する考え方に立脚するとの理解に基づくと思われる。教父たちが司祭職への招きと聖なる童貞性とを密接に結び合わせたのは,現代とは異なる考え方に基づいてのことである。教父たちの著作では独身制を守ることよりは,夫婦関係を避けるようにとの勧めがしばしばなされている。性行為への欲求や人間の状態を過度に卑劣なものとみなしたり,あるいは、聖なる事物に触れる者には清らかさが必要であると考えたためとする。したがって,現代社会とその考え方に合わないとする」。「第三は、司祭職への召命と完全な貞潔への召命が異なるものだとの認識から、司祭の独身制は、独身を受け入れる心はないが司祭職を受けたいと思う者を閉

め出すとする」。「第四は、教会における司祭不足が、独身を守る重荷に起因していると考える」。「第五は、司祭が妻帯しているならば、不忠実、生活の乱れ、逸脱の機会がなくなり、家庭生活のなかで大きな力が与えられるとする」。「第六は、独身制は単に自然に反するだけでなく、正しい人格の成熟を妨げるものだとする。したがって司祭は心の潤いに欠けた人間となり、一般の人々の生活様式を導くための魂の情熱を徐々に失う。全く孤立した生活を送ることから、精神の無力化と落胆に追いやられるとする」。「第七は、司祭志願者が養成の段階で独身制を受け入れることだけを強いられ、人間の正当な自由を充分に尊重していない。また、独身制を受け入れる青年は全く完全な自由をもっておらず、青年自身の理解力や決断力は独身制の責務自体とその真の困難を受け取るには不充分で不相応であるとする」。(第2から第7までは、1312)

これらへの反論のうち一部のみを紹介しておこう。第1の反対意見に対しては、「しかしこの意見は単に初代教会だけに限って論拠を置いている。この時代に既婚者も役務についたことから、公会議が宣言したように『独身制が司祭職の本質から要求されるものではない』ということはできても、ここから独身制の価値そのものを軽視することはできない』(1311)と反論されている。さらに、第3の反対意見に対しては、反論として、「しかし、司祭職は神から与えられる召命であり、教会から認知されないかぎり誰も自分の召命を主張できない。教会は独身の賜物を有する者に召命を限定しているだけである。召命と召命の様態とを切り離すことはできない」とされ、また、第4の論点に関しては、「しかし、プロテスタントなど、聖職者に妻帯を許している他の教会における状態を考察すれば、司祭職への召命減少が独身制に起因していないことは明らかである。召命の減少はむしろ信仰と秘跡を通して人々の教いに務める教会の役割が軽視されているためであろう」とされている(1312)。

II. 同性愛

『大事典』は、「どうせいあい 同性愛」の項目(浜口吉隆; 1275-77)において、同性愛を「男性または女性同士が色情的に魅惑されて性的関係を結ぶこと」(1275)と定義し、「倫理」的には、「……自然法からして同性愛者は性的機能の生殖目的である生命伝達を排除することにより、神の意志に反する重大な侵害をしていることになる」(1276)と述べている。また、『大事典』は、旧約聖書で明白に同性愛に関連する箇所として、「……レビ記の『いとうべき性関係』のなかで男性同士の性行為が禁じられており(レビ 18:22)、必ず死刑に処せられる(同 20:13)」とし、「新約聖書では特にパウロが男女の自然にもとる関係として同性愛を戒めている(ロマ 1:26-27)。男娼や男色をする者は神の国を受け継がないとされ(1 コリ 6:9-10)、そのような者のために律法が与えられているという(1 テモ 1:9-10)」と記している(1276)。

『岩波キリスト教辞典』(以下、『辞典』と略記)の「同性愛」の項目中の「カトリック神学」の節(百瀬文晃;798)は、「キリスト教の歴史では、同性愛が大罪とみなされ、厳しく罰せられた」としながらも、「……現代のカトリック教会では、過去の同性愛に対する罪悪視を修正し、むしろ同性愛者に対する司牧的な配慮を強調している」と述べている。さらに、『辞典』では、「同性に向かう性的指向 homosexual inclination と同性間の性行為 homosexual genital expression とを区別し、指向は罪とみなさないが、行為は即座に倫理的に断罪しないまでも、創造の秩序の欠陥とみなす。司

牧者には、自分の意によらず同性愛指向を有する者を許容し、その人権を尊重しつつ本来の愛の秩序へ向かわせる配慮が求められる(教理省『同性愛者の司牧的配慮について』1986 参照)」とされている。

八木谷は、同性愛(者)に関して、「はっきり拒絶しているのは、ローマ・カトリック教会。同性愛を実行している者には、聖体拝領が許されない。ただし、個々の司教、司祭、修道者のなかには擁護者もおり、しばしば彼らが処分されたことが報じられている」(278)と記している。

III. 告解

『辞典』は、「告解」の項目中の「歴史と実践」の節(岩島忠彦;397)において、「罪のゆるしは、キリストの福音の本質的部分である。告解は、この福音の恵みを、その時々に具体的な形で実現する秘跡である。告白者は神に自分の罪のゆるしを願い、神がこれに応えてその人を赦す。その際、司祭はキリストの道具となって働いているだけである」と述べ、歴史的には、6世紀末頃から私的告白の習慣が広まり、現在に至ったとし、「第2ヴァティカン公会議以降、告白の行為のみをさす告解よりも、ゆるしの秘跡という表現の方が一般的となった」と記す。

『辞典』によれば、「告解は、通常聖堂内の告解場でなされるが、場所は自由で、司祭との会話の形で受けることもできる。告解は、究明、痛悔、決心、告白、ゆるし、感謝、償いの流れで進む。まず前の告解以後の罪を思い起こし、それに対する悔悛の思いを起こし、繰り返すことのない決心をして、罪を告白し、司祭からゆるしの言葉を受ける。告白後、感謝の祈りを唱え、命じられた償いを果たす」。また、『辞典』は、「……告白の場は、信徒が信仰生活の指導を受ける場にもなっている(信心の告解)」とし、「告解の秘跡は聖体の秘跡と並んで信仰生活にとって重要なもの……」であると述べている。『辞典』は、最後に、「司祭には、告解において知った事柄について絶対秘密を守る重い義務が課せられている」と記す。

告解の守秘義務等に関して、現行『教会法典』は、次のように規定している。

- 第983条 (1) 秘跡上の秘密は不可侵である。したがって、 聴罪司祭は、ことば又は他の いかなる方法をもってしても、またいかなる理由に基づいてもゆるしの秘跡を受ける者を決して裏切ってはならない。
- (2) 秘密を守るべき義務は、通訳が立てられる場合には通訳及び告白による罪の内容を何らかの方法をもって知った他のすべての者にも及ぶ。
- **第984条** (1) 聴罪司祭は、漏洩の危険が全くない場合でもゆるしの秘跡を受ける者に不利益を与えるおそれのあるときは、告白によって得た知識の使用を絶対に禁じられる。
- (2) 権威ある地位に置かれた者は、いかなる時に行われた告白であっても、それによって得た罪についての知識をいかなる方法であれ外的統治のために使用してはならない。(『カトリック新教会法典』533)

補遺B

ここに添付するのは、*The Internet Movie Database* の "Comments index for Priest" のセクションから抜粋した情報であり、各ユーザー・コメントの番号、要約、ユーザー名、日付の 4 点に関するものである。なお、同資料へのアクセスの日付は、2003 年 2 月 19 日である。

- Flawed but fascinating drama by jbuck_919 on 31 January 2003
- A very dubious film by Gregory Goldlust on 17 September 2002
- Inter faeces et urinas nascimur by Robert J. Maxwell on 11 August 2002
- Very intelligent and beautiful piece of film making by Bogey Man on 20 May 2002
- 5. Very Touching Movie! by Paul on 13 April 2002
- 6. One of the best films i've [sic] ever seen by irve77 on 28 January 2002
- Well-Acted and Powerful by shark-43 on 15 January 2002
- 8. Certainty of Vocation, Humanity/Spirituality, Challenging Moral Issues by Josh on 24 December 2001
- 9. EXCELLENT!
 by Janeway237 on 31 October 2001
- 10. Awesome! by scout001 on 14 October 2001
- 11. Excellent Film by endymion82 on 7 October 2001
- 12. Well done British Cinema by Durante on 26 July 2001
- 13. double entendre heap of crap by mgatton on 23 April 2001
- 14. Stirring, controversial, well-acted religious pot-boiler still, a mixed blessing. by gbrumburgh on 11 April 2001
- 15. I don't think it's about what most people think it's about. by trojanrabbit97 on 11 March 2001

- 16. Intense and deeply moving by Mitch-38 on 14 January 2001
- 17. truly emotive by nalegria on 12 October 2000
- Great Cast, Flawed Plot
 by lauralee on 29 September 2000
- Oh you are awful by Muchacho on 4 June 2000
- 20. Sensitive? Not! by Kirill Galetski on 24 May 2000
- Forget the controversy
 by Charles Thomas Tatum, Jr. on 27 March 2000
- Absorbing Drama
 by harry-76 on 11 February 2000
- 23. Quite a thought-provoking movie by jimmyplm on 18 January 2000
- Keep The Faith
 by NJMoon on 11 September 1999
- 25. It's not easy being a gay priest! by Michael Bregman on 5 August 1999
- 26. Linus Roache IS the conflicted Fr. Greg; Acting at its best by Bob Drake on 18 July 1999
- 27. An incredibly well-acted, soulful drama by doeadear on 10 June 1999
- 28. This wonderful film never fails to move me by Rocki White on 8 May 1999
- Politically Correct bigots will love this Dreck by Anonymous on 16 April 1999
- Brilliant film
 by Anonymous on 20 February 1999
- 31. A Powerful Film! by Patrick Sullivan on 25 January 1999
- 32. Tender and well acted one for the brain cells by Marek Vaygelt on 25 January 1999
- Beautiful tale of God's grace
 by Anonymous on 18 January 1999

34. A superb, sensitive film that shows the conflict in which gay people frequently involve themselves when they seek a spiritual life within the structure of organized religion.

by Todd Victor Leone on 16 January 1999

35. What an all-clever film!

by Christophe Renaudot on 23 December 1998

 Inspired, multi-layered film albeit offers no practical solutions by Yanson Ching on 29 November 1998

37. Down to earth...human story....

by Kelster-3 on 26 November 1998

38. Tiresome and Bigoted

by sirdar on 6 November 1998

参考資料

Ang, Ien. Living Room Wars: Rethinking Media Audiences for a Postmodern World. London: Routledge, 1996.

浅見克彦『消費・戯れ・権力』社会評論社、2002年。

Barker, Chris. Cultural Studies: Theory and Practice. London: Sage, 2000.

Bassnett, Susan, ed. Studying British Cultures: An Introduction. London: Routledge, 1997.

Brooker, Peter. Cultural Theory: A Glossary. London: Arnold, 1999.

"The Business." Sight and Sound July 1995: 4.

Dwyer, Michael. "A Write Cracker." Irish Times 9 Mar. 1995, city ed.: 13.

Edgar, Andrew, and Peter Sedgwick, eds. Key Concepts in Cultural Theory. London: Routledge, 1999.

Fiske, John, and John Hartley. Reading Television. 1978. London: Routledge, 1996.

Freccero, Carla. Popular Culture: An Introduction. New York: New York UP, 1999.

藤田真文「カルチュラル・スタディ派におけるメディア論とネオ・マルクス主義的社会構成体論との関連性」『新聞 学評論』35 (1986): 1-11。

Hall, Stuart. "Encoding/decoding." Culture, Media, Language: Working Papers in Cultural Studies, 1972-79. Ed. Stuart Hall, Dorothy Hobson, Andrew Lowe and Paul Willis. 1980. London: Routlege, 2002. 128-38.

花田達朗・吉見俊哉・コリン・スパークス編『カルチュラル・スタディーズとの対話』 新曜社,1999年。

The Internet Movie Database. UK Site. URL (http://www.uk.imdb.com/).

The Internet Movie Database. USA Site. URL (http://www.us.imdb.com/).

伊藤守・藤田真文編『テレビジョン・ポリフォニー ―― 番組・視聴者分析の試み』世界思想社,1999 年。

実川元子訳 ジミー・マクガヴァーン『司祭』 徳間書店,1996年。

『カトリック新教会法典』日本カトリック司教協議会教会行政法制委員会訳 有斐閣,1992 年。

McGovern, Iimmy. Priest. ts., 1993. BBC Films, London.

Morley, David. Television, Audiences and Cultural Studies. London: Routledge, 1992.

Ogle, Tina. "Roache Material." Time Out 15-22 Mar. 1995: 24.

大貫隆・名取四郎・宮本久雄・百瀬文晃編『岩波キリスト教辞典』岩波書店,2002年。

Priest. Dir. Antonia Bird. BBC Films, 1994. DVD. Miramax, n.d.

坂本百大・川野洋・磯谷孝・太田幸夫編『記号学大事典』柏書房、2002年。

『シネマスクエア・マガジン No.129 —— 司祭』シネマスクエアとうきゅう,1996 年。

商学論集

新カトリック大事典編纂委員会編『新カトリック大事典』第3巻 研究社,2002年。

『司祭』アントニア・バード監督 BBC フィルムズ, 1994年 DVD 日本コロムビア, 1999年。

Storry, Mike, and Peter Childs, eds. British Cultural Identities. London: Routledge, 1997.

Turner, Graeme. British Cultural Studies: An Introduction. 2nd ed. London: Routledge, 1996.

八木谷涼子『知って役立つキリスト教大研究』新潮社,2001年。

吉見俊哉編『メディア・スタディーズ』せりか書房、2001年。